

エッセイ

やじ馬昆虫撮影記

(その3 昆虫たちと話す!?)

千葉大学大学院 准教授

野村 昌史 (のむら まさし)

子供のころの愛読書に「ドリトル先生」の本があった。ご存じの方も多いと思うが、ヒュー・ロフティング原作で井伏鱒二も翻訳している子供向けの文学作品である。詳細は省くが、動物と話すことができるドリトル先生の活躍を描いたストーリーで、当時は動物と会話できたら楽しいだろうなあ、と憧れのような気持ちで読んでいたものである。その後昆虫学の世界に進んでも、「この虫と話せたら実験条件を決められるのに」なんて考えることもあるが、もちろん叶ったことはない・・・しかし私は昆虫を撮影する場面で2度ほど彼らと会話したことがある。

昔読んでいたある昆虫雑誌の表紙を飾っていたのが、キバネツノトンボ。その黄色い翅の勇姿に釘付けになった。初めて見る姿に魅了され、いつかは出会いたいと思っていたのだが、機会がなかった。ところが卒業生が生息地を知っているという。場所は栃木県の河川敷、一緒に出かけることになった。その日は5月にしては震えるほど寒く、どこを探しても姿はない。諦めそうになったときに「いました」と卒業生の声、写真を見てから実に30年目の出会いだった。

気温が低いので動きは鈍く、写真は撮れたものの何か物足りない。しばらく観察しようやく気がついた・・・翅の位置が違うのである。記憶の中のキバネツノトンボは翅を開いていたが、目の前の個体は閉じていたのだ。それがわかれば広げるのを待つしかない。でもなかなか開かない。つい「おい、翅を開いてよ」と声をかけてしまった。すると、音もなく翅を開いてくれたのである(図-1)。偶然で片付けられそうな出来事かもしれないが、私は気持ちが通じたのだと思いたい(笑)。

美しいゼフィルスも気になっていたが、翅を開いたオスを撮影する機会に恵まれなかった。今年こそは撮影したいと、まずは近場で見られるミドリシジミを狙うことにして情報収集。発生時期や少し遠いが確実に見られる場所もわかった。あとは朝の天気次第だが、週間予報では連日雨のなか1日だけ晴れの日があった。しかしその日は朝から講義・・・しかも遠い・・・でもこの日を逃すと見られないかも、という気持ちが勝り、出かけることにした。

朝4時半に起きて6時に現地に到着したが、曇っている・・・ハンノキには成虫が数匹いるが動く気配はない。6時半を過ぎたとき、曇天のなか1匹が下草に降りたので、カメラを構えた。じっと待つこと20分・・・私の願いが通じたのか、7時前に徐々に雲が晴れてきた。すると彼は日射しに体を向けて、ゆっくりと翅を広げてくれた。初めて見るオスの翅の輝きだったが、その翅は少し褪せて痛んでいた。それでも個人的には満足した。

そのとき、少し離れたところから「ねえ・・・」と呼ばれた気がした。声が聞こえた方を見ると、日射しを浴びて眩しく輝く個体がいる。近づくと傷一つない新鮮な個体である。慌ててシャッターを押した(図-2)。彼が飛んでいったあともしばらく呆然と立ち尽くしたが、ふと我に返ると大変な時間・・・大急ぎで大学に向ったが奇跡的に講義に間に合った。

今回の話は、もちろん実際に昆虫たちと会話したものではない。でも昆虫たちとたくさんふれあえば、気持ちが通う体験ができるのではないか。そして撮影の場だけでなく調査や実験でも、彼らの気持ち(?)を感じることができるよう、経験を積んでいきたいものだ。



図-1 翅を開いたキバネツノトンボ



図-2 輝く!ミドリシジミのオス

NEWS

新規水稲用倒伏軽減剤入り

基肥一発肥料「楽一 28N」

ラインナップを強化して販売開始、住友化学

住友化学はこのほど、2016年1月18日に肥料登録と農薬登録を取得した新規水稲用倒伏軽減剤入り基肥一発肥料「楽一 28N」（15kg袋）の販売を開始した。既に販売している「楽一 27N」と比べ、窒素保証成分量を1%高め、農薬・倒伏軽減剤の有効成分量を0.001%低くした銘柄で、製品ラインナップを充実させた。

楽一 28Nは、同社が開発した倒伏軽減剤「ウニコナゾールP（一般名）」を含有した被覆肥料と複数種類の被覆尿素および化成肥料を配合した農薬入り配合肥料。配合した肥料の肥効パターンから推奨する主な対象地域と品種は、東北地方のあきたこまちやひとめぼれ、西南暖地の早期栽培こしひかりなどの倒伏しやすい良食味米品種となっている。

楽一 28Nの肥料保証成分量は窒素、リン酸、カリが、それぞれ28.0%、10.0%、7.0%で、ウニコナゾールPの有効成分量は0.0030%。使用量は10a当たり20～40kgで、施肥窒素量として5.6～11.2kgに相当する。水稲の耕起～代かき時の全面施用土壌混和、および移植水稲の田植え時側条施用、湛水直播水稲の播種時側条施用として使用する。

楽一 28Nは、販売中の楽一 27Nと比べ窒素保証成分量を1%高め、農薬・倒伏軽減剤の有効成分量を0.001%低くすることにより、楽一 27Nでは窒素が不足する場面や、薬効が強すぎて窒素の肥効とのバランスが悪く適用できなかった場面に適用できる。2銘柄の品揃えにより、圃場の地力や窒素要求量に合わせて銘柄を選択できるようになった。

楽一 28Nの上市により、「楽一」シリーズは肥料保証成分量、肥効パターン、農薬有効成分量の異なる7銘柄となった。栽培の難しいこしひかり、あきたこまち、ひとめぼれなど倒伏しやすい良食味米品種の栽培に普及拡大していく。



「移植と直播」をテーマに農業機械部会セミナー開催 農業食料工学会・農業機械部会

農業食料工学会（会長：内野敏剛九州大学教授）農業機械部会は3月18日、埼玉県さいたま市の農研機構生物系特定産業技術研究支援センター（現農業技術革新工学研究センター、以下農工研セ）の花の木ホールで、農業機械部会セミナー～水稲栽培技術を展望する～「移植と直播」(I)を開催した。

セミナーは、農業機械部会の宮原佳彦部会長（農研機

構農工研セ）のあいさつで開会。基調講演は、九州大学の伊東正一教授が、「世界のコメ情勢と日本市場のゆくえ—TPPの政府間合意を踏まえて—」と題して、国際穀物価格の高騰の背景や海外におけるコメの生産と国際価格などについて述べるとともに、TPPに関わり日本農業の国際化の必要性を強調した。第二部は、「移植と直播の最新機械化技術と今後の課題」をテーマに行われ、講演内容は次の通り。

「移植（密播・疎植）技術の現状と課題」雑賀正人氏（井関農機）、「移植（成苗）技術の現状と課題」幡上宏政氏（みのる産業）、「湛水直播（鉄コーティング）技術の現状と課題」福永 究氏（クボタ）、「産業用無人ヘリコプターによる鉄コーティング種子散播技術について」望月良真氏（ヤンマーヘリ&アグリ）、「移植技術の現状と課題」秦 啓二氏（三菱マヒンドラ農機）、「水稲無コーティング種子の代かき同時播種栽培の紹介と水稲の低コスト生産技術の展望」白土宏之氏（農研機構東北農業研究センター）。

講演終了後、宇都宮大学の松井正実教授を座長に、「国際情勢を踏まえた移植と直播技術の今後の展開と研究方向」と題した総合討議が行われ、生産コストの低減に向けた技術開発をめぐり活発な意見交換が行われた。



水稲の生産コスト削減に向け移植、直播の最新技術を討議

【事務所移転】

株式会社クレハは4月1日付けで組織改正を行い、医薬品事業部と化学品事業部アグロ製品部を統合して、「医農薬事業部」に再編。アグロ製品部事務所を移転した。

新住所（名称：株式会社クレハ 本社別館）

〒169-8503

東京都新宿区百人町3-26-2

電話 アグロ製品部 営業グループ 03-3362-7319

技術グループ 03-3362-7320

■訂正

4月号口絵1頁目の「土着カブリダニ類の代替餌の探索（岸本英成氏原図）」の写真位置が左右入れ違っていました。訂正してお詫びいたします。